青木香三分まんていかの油と胡麻の油加減してよく煎じつめ、きぬ袋にて漉し、麝香龍腦三分合練云々、

〔女日用大全上〕伽羅油の方の事

大白唐蠟十兩胡麻油冬は壹合五勺夏は壹合丁子壹兩白檀壹兩山梔子二匁甘松壹兩右四いろのくすりをあぶらにいれ、火をゆるくしてねる、二日めに蠟をけづりていれ、火をつよくして、くろいろになるほどにねりつむる、こげくさくなるとも、湯せんのとき、そのにほひはのくなり、よくいろつきたるときあげてさまし、龍腦貳匁麝香三匁いれてよく〳〵まぜあはす、

〔落穗集十〕以前御當地諸賣買物の事

伽羅の油之義、七八十年以前迄は、前髪立の兒小姓抔之義は格別、其外上下共に、年若き男の鬢に油抔をぬり付候と有之は、なまぬるき樣に致し、となり、其時代には、もみ上ゲの頰鬢と申義は時花、尤侍の中にも有之なれ共、先は歩行若黨小者中間のたぐひにあまた有之候が、其輩は蠟燭のながれを油にときゆるめ、松やになどを加へて伽羅の油と名付用ひ申す如く有之也、其節も伽羅の油入用に候へば、藥種屋へ申遣し調へる如く有之たる事故、今時の如くなる伽羅の油店抔と申ては、終に見かけ不申也、

〔本朝世事談綺二器用〕伽羅油

正保慶安のころ、京室町髭の久吉賣はじむ、其後三條の市宇賀繩手の五十嵐これを製す、江戸にては、芝の大好庵、脊虫喜右衞門などはじめなり、其以前は胡摩の油に、白檀丁子等を浸して、匂ひ油と稱す、おくれ髪を付るは、亥及草を以す、

〔本朝世事談綺正誤一〕伽羅油

按るに脊虫喜左衞門といへる油見世、芝に今もつてあり、今見せにあるところの大鼓の看板、